

聖書：コリント人への手紙第二 8：1～8

説教題：この恵みのわざにもあふれるように

日時：2025年1月12日（朝拝）

コリント人への手紙第二は、前の7章までで一つのまとまった部分を読み終わりました。そこではパウロとコリント教会の間にあった難しい関係がテーマになっていましたが、その関係は改善に至っていることが最後の方で述べられました。7章16節：「私はすべてのことにおいて、あなたがたに信頼を寄せることができることを喜んでいきます。」この関係回復に基づいて8章から新しいテーマへと話が進みます。この8章と次の9章で取り扱われるのは献金に関することです。4節に「聖徒たちを支える奉仕の恵み」とありますように、困窮した状況にある聖徒たちへの援助献金に関することです。これは先のコリント人への手紙第一でも触れられていました。Iコリント16章1節：「さて、聖徒たちのための献金については、ガラテヤの諸教会に命じたとおりに、あなたがたも行いなさい。」パウロはその手紙を第3回伝道旅行、エペソに滞在していた時に書きました。この第3回伝道旅行の目的は、アジアの大都市エペソで集中的な伝道を行うこと、またそれまでの伝道旅行で建設した異邦人の諸教会のフォローアップを行うことその他に、この聖徒たちのための献金を集めることがありました。この聖徒たちとは特にエルサレムの聖徒たちのことです（Iコリント16章3節参照）。エルサレムの教会は使徒の働き8章に記されている通り、迫害を受けて厳しい状況にありました。それまでユダヤ教の中の一つのムーブメントと見られていたキリスト教が実はユダヤ教と区別されるものであることが明らかになった時、エルサレムのクリスチャンたちはユダヤ人から迫害され、社会から排斥される扱いを受けました。それに加えて大飢饉が起きました。そんなエルサレムの聖徒たちを支えるための愛の献金です。

パウロはここにさらに大きな意義を見出していました。それはこの献金がユダヤ人の教会と異邦人の教会を結ぶ絆となることです。異邦人世界への福音宣教が進むにつれてユダヤ人の教会と異邦人の教会にはある種の軋轢が生じていました。そのまま行けばキリスト教会が二つに分断される恐れがありました。そこでパウロは異邦人の諸教会を回ってエルサレムの聖徒たちのための献金を集め送ることによって、ユダヤ人の教会と異邦人の教会が主にあって一つの教会であることを目に見える形で現そうとしたのです。またパウロは異邦人の教会はユダヤ人の教会に霊的なものを負うてい

るのだから、物質的なもので彼らにお返しする義務があるということもローマ人への手紙 15 章 27 節で述べます。しかしコリント人への手紙第一を書いた後、パウロとコリント教会の関係は悪化しました。そのため、コリント教会のこの活動はストップしていたようです。しかし関係が改善した今、パウロはもう一度、このプロジェクトに関して彼らへのアピールを行うのです。

その際、まずマケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを証しすることから始めます。彼らは激しい試練の中にありました。マケドニアの諸教会とは具体的にはピリピ、テサロニケ、ベレアの教会などを指します。その伝道の様子が使徒の働き 16～17 章に記されていますが、そこにもパウロたちが受けた迫害の様子が記されていますし、その後、それらの教会に宛てた手紙にも信者たちへの迫害が継続していたことが記されています。ピリピ人への手紙 1 章 29～30 節：「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。かつて私について見て、今また私について聞いているのと同じ苦闘を、あなたがたは経験しているのです。」 テサロニケ人への手紙第一 2 章 14 節：「兄弟たち。あなたがたはユダヤの、キリスト・イエスにある神の諸教会に倣う者となりました。彼らがユダヤ人たちに苦しめられたように、あなたがたも自分の同胞に苦しめられたからです。」 ところがその彼らが惜しみなく、進んで献金をしたと言われています。この彼らの行為を指してパウロは 1 節で「マケドニアの諸教会に与えられた神の恵み」と言いました。「恵み」というと、私たちは何か自分が受けることを考えるかもしれませんが。確かに恵みとは通常は神が無条件で私たちに与えてくださる一方的な好意や祝福を指します。しかしもし人が自発的に必要を覚えている他の人々のために自分の持っているものを寛大に分け与えようとするなら、それは神の恵みはその人の中で生きて働いていることを示すものです。そういう意味で彼らが行ったこの献金の行為は神の恵みの現れ、彼らに与えられた神の恵みと言えます。

なぜ彼らはこうできたのでしょうか。2 節にまず、それは彼らの満ちあふれる喜びから出たことが記されています。これは言い換えれば救いの喜びのことです。それはイエス様を知る喜びと言っても良いと思います。イエス様を知り、イエス様を自分の救い主として持つということはイコールすべてを持つことと同じです。もう自分の救いは確定しており、後はイエス様に信頼し、ついて行くだけです。この満ちあふれる喜びを知る者となる時、私たちはそれまでのように自分で自分の生活を守ろうとして

自分のことばかり考える生活から解き放たれます。そして神のみこころに添って他者に思いを向ける生活へと導かれます。他の困っている人のために神と同じ心で、どのように助けることができるか、自分がどのようにして神の道具になることができるかと考えるようになります。

そしてもう一つ、極度の貧しさが惜しみなく施す富となって現れたと言います。一見これは矛盾する言葉のようです。どうして極度に貧しい人が惜しみなく施すことができるのかと。これはこのような厳しい状況にあった彼らだからこそ一層の共感をもって同じように困っている兄弟たちへの憐みの行為へと進んだということなのでしょう。迫害の毎日の中でマケドニア人は極度に貧しい中に置かれています。そのような迫害の痛みを直接知る彼らは、エルサレムで同じように、いやもっと厳しい状況にあるかもしれない聖徒たちのことを深く思うことができたのです。こうして彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさとは、彼ら自身が激しい試練の中にあるにもかかわらず、惜しみなく施す富となって現れたのです。これは確かに神の恵みの働きの現れというほかない出来事だったのです。

その結果、彼らは自ら進んで、力に応じてささげました。この「力に応じて」ささげることが原則です（次回の12節でも述べられます）。しかしマケドニア人はそれ以上だったとパウロは言います。4節では「大変な熱意をもって私たちに懇願」したとあります。おそらく厳しい迫害の中にある彼らを思ってパウロの方からは何も言わなかったのでしょう。ところがマケドニア人の方から、是非させてほしい、是非私たちもこのプロジェクトに参加させてほしいと懇願して来たのです。ここに「聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたい」とあります。ここには原文で3つの重要な言葉が並んでいます。一つは「奉仕」（ディアコニア）、一つは「恵み」（カリス）、もう一つはあずかると訳されているコイノーニア、通常は「交わり」と訳される言葉です。一つ目の奉仕とは、エルサレムの聖徒たちに仕えること、具体的には献金を送ることです。この献金を送って彼らに仕えたい、彼らを支えたい、彼らに奉仕したいと願った。二つ目は恵み（カリス）。これはすでに1節に出て来ました。マケドニア人はこの献金プロジェクトに関わることを「恵み」また「特権」と考えました。そしてもう一つは交わり。ともすると私たちは交わりを、他の人々と色々お話して自分が楽しいと感じることというイメージを持っているかもしれませんが。今日の交わりは楽しかった～などと使いやすい。もちろんそういう面もあるでしょう。しかしここでの交わりは連

帯することです。困っている人に自分が持っているものを分け与えることです。見たことも会ったこともない、同じ主にある兄弟姉妹を支援することです。これを彼らは交わりと捉え、そのような交わりに生きることを彼らは求めたのです。

それは何よりも主への献身の現れであると5節にあります。それはパウロたちが思っていた以上の姿でした。主に感謝し、主を愛し、自らを主にささげたいという思いの現れです。そしてこの神の働きのためにパウロたちが立てられていることを彼らは認め、パウロたちにその献金を委ねました。

このことを受けてコリント教会もそのようであってほしいというアピールが6節以降になされます。まず6節でパウロはテトスに勧めたことについて述べます。テトスはこのパウロの手紙をこれからコリント教会へ持ち運ぶ人です。その彼に、コリント教会ですでに始められたこのわざが完成に至るようにと勧めたことをパウロはまず述べます。

そしてコリント人たちへの直接的な勧めの言葉が7節にあります。パウロは「あなたがたはすべてのことに、・・あふれています」と言います。コリント人たちには多くの賜物が与えられていました。信仰、ことば、知識、あらゆる熱心、・・とリストされています。それらはコリント人たちに与えられた良き特性だったと思われます。そのリストの最後に「私たちからあなたがたが受けた愛」とあり、一見パウロたちがコリント人たちを愛したことを誇っているようにも見えますが、これはパウロたちから受けて今やコリント人たちが内に持っている愛のことを述べたものではないかと思えます。パウロたちの福音宣教と愛ある関わりによって、今やコリント人たちも真の愛を知り、その愛を豊かに持つ者たちとなりました。そのようにすべてのことにあふれているあなたがたは、この恵みのわざにもあふれるようになってください、すなわち愛の献金を行うことにおいてもあふれるようになってくださいとパウロは言います。コリント人たちは多くの恵みを神から受けていましたが、ただそれを「感謝だ！」と言って自らを楽しませ、自分たちのためにだけ使うのではなく、この恵みのわざにおいてもあふれ出る人たちとなってください！とパウロは言うのです。

最後の8節で、これは命令として言っているのではないと言います。つまり強制しているのではない。そのことは9章でよりはっきり言われます。9章7節：「一人ひと

り、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。」 献金は、心から、喜びをもってなされるのが大事です。しかし他の兄弟姉妹の良き模範を見て励ましを受けることは良いことです。彼らがどのように恵みに生きて、そうであるのかを見て、自分自身もその恵みに生きるようにと励まされることは良いこと、正しい方法です。パウロはそうして、あなたがたも神から与えられている特性を発揮する者たちであるようにと訴えています。7節で愛を豊かに持つ者と言われましたが、その愛が本物であることを現すように、それが証明され、明らかにされる人々であるように！と。この愛の献金については、このあと9章の終わりまで話が続きます。

今日の御言葉を通して自らに問いたいことは、果たして1節でパウロが述べたような神の恵みが私たちの内にも見られるだろうかということです。もし私たちがしっかり握りしめている自分の手を緩め、それを開いて、その手に持つものを喜んで、必要を覚えている方々のためにささげることができるなら、それは神の恵みがその人に確かに働いているしるしです。私たちはともすると、自分は今、自分の生活で一杯だから、もう少し生活に余裕ができれば他の献金のことも考えたいと思いやすいものです。そんな私たちにとってマケドニアの諸教会の姿はチャレンジです。極度の貧しさの中にある人たちがこのようにしたのです。いやそういう人たちだからこそできたという面があることも述べられていました。確かに彼らが献げた額は限られていたと思われるかもしれません。必ずしもそれは多くはなかった。しかし額の大小が問題ではないことを聖書は示しています。あのレプタ銅貨2枚を献げたやもめを見て、イエス様は誰よりも多く献げたと言われました。パウロはマケドニア人を見て驚いたのです。極度の貧しさの中にある彼らなのに、自ら進んで、懇願して、彼らの力以上に献げた。その彼らを見た時に、これは神の恵みの働きというより他なかった。神の恵みが深く彼らに働いていることを見ずにいなかったのです。私たちは果たしてマケドニア人のようでしょうか。それとも物質的にははるかに富んでいるのに、そうではなかったコリント人のようでしょうか。そんな私たちにも今日の御言葉は、多くのことにあふれているあなたがたは、この恵みのわざにもあふれる人たちであってくださいと語っているのではないのでしょうか。

私たちが自分の持てるものの中から、困っている人々、困っている教会のために、握りしめている手を緩め、献げることができるなら、それは神の恵みです。神はご自

身を知る者たちが、ご自身を映し出す者たちとして、そのように進んで応答することを期待しておられますし、今日の御言葉を通してもそのように働きかけておられます。私たちもこの恵みに生きる者たちとされたいと思います。私たちに与えられた愛が本物であることを具体的な献金のわざにおいても表して行く者たちでありたいと思います。神がイエス・キリストにあって与えてくださった大いなる救いを感謝し、そのキリストにあって神がこれからも私たちを守り導いてくださることを喜び、信頼して、私たちの感謝と献身を、この恵みのわざにもあふれる者となることによって表して行く者たちへ導かれて行きたいと思います。